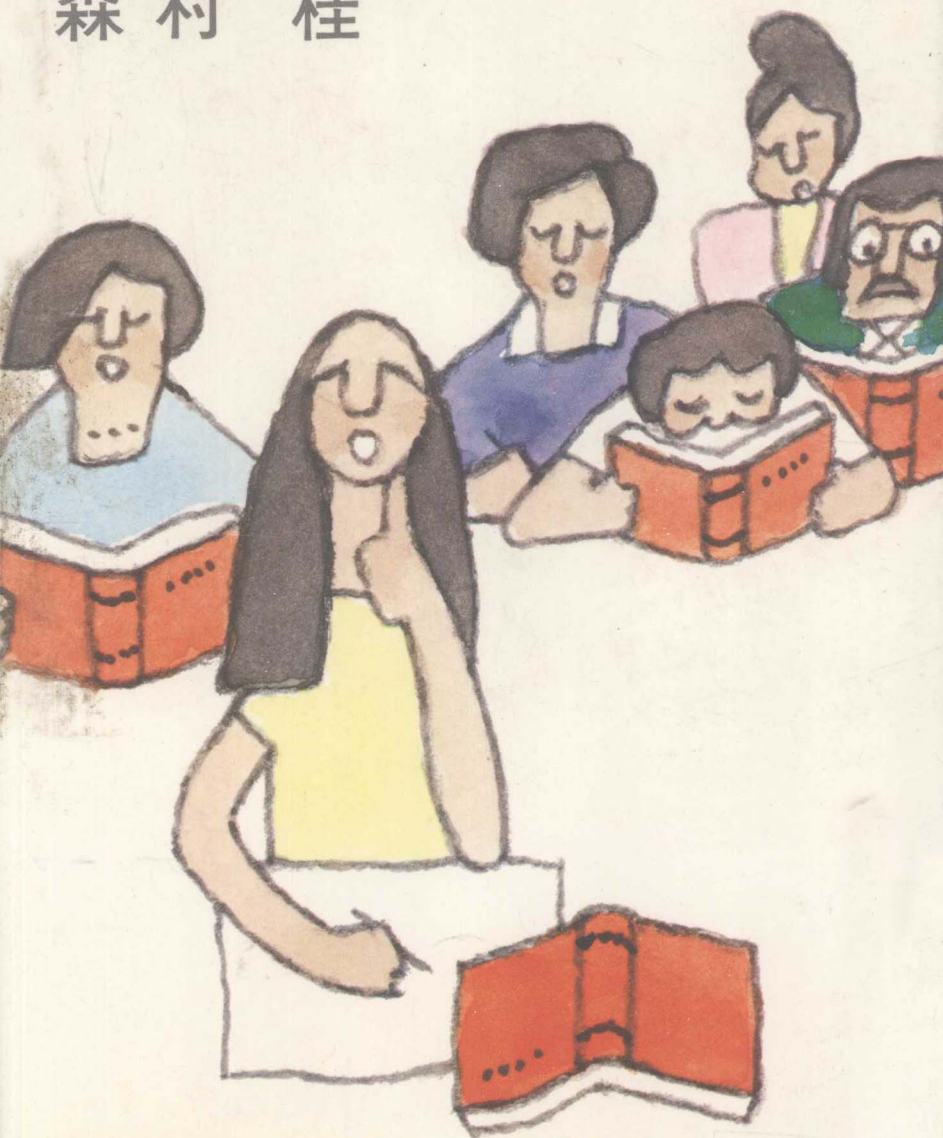


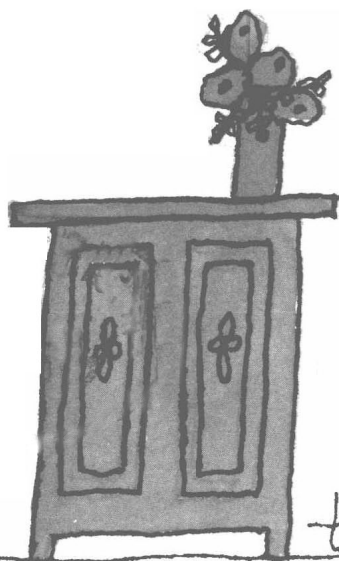
もうひとつの学校

森村 桂



もうひとつの学校

森村 桂



講談社

もうひとつの学校

昭和五十二年六月二十八日第一刷発行

著者——森村桂

© Katsura Morimura 1977, Printed in Japan



発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽一三—三 郵便番号二三 電話東京〇三—九四一—三二 振替東京一三九〇

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——大製株式会社

定価——七九〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえします。

もうひとつの学校 目次

ある日とつぜん

8

こんな学校に行きたい

22

赤字はタッタの五千万(?)

36

ああ、ボランティアさま

50

こんな学校を作りたい

68

学校で教えないこと

74

夢をひろげろ

80

生涯に一度の講義を

96

私には何もできない

110

それはもうひとつの学校

120

源氏物語をとにかくも読む

130

その日の朝

146

手作りの学校とは

158

事務局は大忙し

176

小さな小さな暮しの学校

188

いちばんうしろで

206

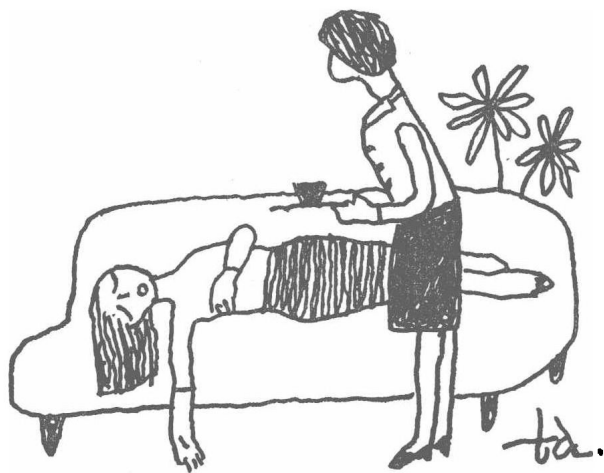
あとがき

221

装幀・挿絵 宮田武彦

もうひとつの学校

ある日とつぜん



人はたぶん、誰でも夢を持っている。私もまたいくつかの夢を持って生きてきた。持った以上は実現させたいと思う。だが、まさか学校を作ることを夢にするなんて、思ってもいなかった。

暮しの学校を作りたいと思ったことはある。何とかピカタだとか、アラアラタルト・ナニナニだとか一見ヨーロッパの片田舎風創作料理やケーキには強くとも、日常のみそ汁をおいしく作れないため、家庭を持ってから思いもかけぬ肩身の狭さを味わったからだ。

しかし、勉強をするための学校を作りたくなるとは、思いもしなかった。私は勉強というものが、むしろ大嫌いであつたからだ。

「勉強は誰のためでもない、自分のためですよ。後で後悔するのは、あなた自身ですよ」

ただし、後悔なんぞ、一度だってしなかった。三十六歳の四月五日、人生も半ばを越しかかったその日まで。そう、まさか、その日、突如として心臓発作などというものにおそわれるなんてことを、想像してもいなかったように。

その日、私はとても元気だった。身体だけでなく精神が張り切っていた。その日より一週間ほど前、私は八年近く住んだ池上のわが家を引き払い、中央線西荻窪の駅から、不動産屋の広告でいうと五分のところに、仮住いをする事になったのだ。池上の家は、石段を百十一段も登らねばならない。登ったら最後どこを向いてもお墓ばかり。そのはずれに住んでいた私にとって、駅から五分のその家は、南の隣家からガクンと下った窪地で、五十年前に建ったオンボロ幽霊小屋とはいえ、私にとっては別天地であった。何しろ、駅のそばには生きのいい魚を売る市場もあれば、素通りしにくい洋菓子屋さんもある、おまけに、あっちにもこっちにも、デブの大猫が、ノッソノッソ、ブルンブルンと歩いているのだ。今でこそ、アパートだらけにはなっているが、それは娘時代に住んでいた西大久保を思い出させた。"お墓人"とばかりつきあっていた私は、生きて暮している人が恋しかった。しばらくでもいい、どうしても住んでみたいと思った。幸いにして、わが夫タニグチサンは（以後、もし彼が登場する時は、サンづけにすることをお許しあれ。主婦となった私が、よその奥さまの如く、『谷口が……』などと人様にいつているのを聞いた彼が、『どうして、ヒトのことを呼びつけにするの』といちいちうるさいのだ）、四月から北アメリカと南アメリカを、端から端まで、スイカを割るようにタテ割りにした自動車旅行に出發する予定であったから、その半年間は、チャンスであった。ところが、出發を前にして、グアテマラで大地震が発生した。そのため彼は出發を見合わせた。しかし、引越しのことはすでに

決めてあったので、もちろん引越しとあいなった。仮住いとはいえ、家財道具などもう一組そろえるなど無駄なことは出来ないから、必要なものは、全部運ぶことになった。

主婦たる私の仕事といえは手伝ってくれる友達に、景気をつけることだけであつたとはいふものの、やはり、疲れがどこかに重なつたのだらう。出先でいきなり、心臓発作を起してしまつた。

実をいうと数年ほど前、すい臓炎と腎臓炎を併発して、昏睡状態になつたことがある。しかしその時は、身体まですっかり弱つていて、あげくに意識ももうろうとしていて、何やら、アメーバの群とも南の国の花の群落ともいえるような不思議の国を旅しているような夢を見たものだから、やれうれしや、ここが天国かと思つて、浅はかにもひどく安心してしまつたものだったが、今度は違つていた。意識はもうろうどころか、細い下り目は、カッと開き、頭も日頃と同じように、ない知恵が何とか動こうとしていたし、声も出た。ただ心臓だけが、左の胸から飛び出さんばかりに、ドクッドクッと音をたてはじめたのである。ほんの二、三秒で、静まると思つていた。しかし、長い。一時の気まぐれ、機械の接続ミスではなかつた。レッキとした、心臓発作であると気がついた。

「ただ今、Nがまいりますから」

ちょうど取次ぎの若いお嬢さんが、お茶を持って入つて来てくれたので、

「心臓発作です。すみませんが、お医者さん呼んで下さい」

その人はびっくりして部屋を出ていった。何でもあわてるたちの私にしては氣丈だったなとうれしくなったが、正直いって、あわてたいにも立ち上ったり大きな声を出したり出来なかっただけ。お嬢さんはすぐにもどって来た。近所のお医者さんに連絡がつきましたといってくれた。心臓はいまやとび出しそうだ。私は自分の腕で押えている自信がなくなった。

「すみません、あの、とび出しちゃいそうなので、押えて下さいませんか」

「こうですね」

素直な人だったらしい。カーディガンの上から押えてくれる。駅のホームとか往来とかでなくてよかった。お嬢さんは、両手からはじき出そうな動悸に、びっくりしている。それでも懸命に、押えてくいとめようとしてくれる。お医者さんがくるまで、もつものだろうか。

「大丈夫ですか」

訪ねた相手であるNさんがかけこんで来た。色の白いお通さんのような感じの人だ。ちょっと気分が悪くなったぐらいなんだろうと、やさしくのぞきこんだが、心臓と知って、顔がひきつっている。私をみつめて一言、

「がんばって。お医者さまもうすぐですから」

私はなるべく、頼もしげにニコリ笑ってみせた。

棺ひろぎに入って、人間はじめて決まるという。死に際というのは、肝心である。人間、やせがまんをして生きたい。普段が人並以下であるならば、せめていざという時だけ、やせがまんをして

みたいではないか。

桂よ、ここが、勝負なのだ。もしかしたら、お医者さんは間に合わないかもしれない。間に合ったとしても、この、とび出しそうな心臓を、ハテ、どうやって、とめられる。何かいうことはないか、心残りはないか。私は、映画などに出てくる、名場面を思い出そうとしていた。

『最後の橋』というのはよかった。橋を渡りさえすれば、自由の身になれる橋を、もう一步で渡れるというその時、撃たれた。撃たれた男と女の、その手だけがのびて、もう少しでつながりそうになって、しかし、その手がとまった。

せめて、わが夫タニグチサンに、連絡をしてもらおうか。彼はすぐにタクシーをつかまえる。多分、交通渋滞。やっと着いたもののこの部屋がわかるだろうか。すぐにわかったとしてこのドアをあけて辛うじて、生きている私を発見して、

「何だ、間に合ったのか。なら、何もパチンコの途中呼び出さなくなたって」

ガクッ、首が折れる。ラストシーンとしては、少々、粗末な気がしないでもない。

Nさんに、口述筆記をたのもうか。わが母にいつて下さい。氣丈に生きてくれと。オフクロさま、お通夜の席でいうだろうな。

「ほんとに、この子は、何も、グチばかり、三十二枚半もしゃべらなくなたって」

人間いざという時に解る。オフクロさまにもタニグチサンにも私の氣持なんて解りやしない。となれば、ここで死んでは無駄死にだ。タニグチサンは、喜ぶだろうな、彼は何しろ、再婚した

友達を、やたらにうらやましがっていた。彼はある時、つい本音をもらしたものだ。

「お前、あまり早く死ぬのはやめろよ。俺はお前が死んだら、お棺の前で、さめざめと泣かなきゃいけない。こみ上げてくる笑いかみころして、さめざめと泣くのに、けっこう修練がいるんだ。まだ練習していない」

それでも、オフクロさまは、オフクロさまである。彼女は、仏壇に、オヤジさんの写真と共に私の写真を並べるだろう。そして、毎日、私の大好きなケーキを、昨日はチーズケーキ、今日は、チョコレートレアケーキ、明日は、サクランボ・タルト、あるいは、オフクロさまが年に一回しか作らない、作ったあとは疲れるから一時間は、肩をもちます、ちらし寿司を作ってくれるに違いない。さらに、私の友達は感謝するだろう。

「モリ、あなた、生きてるうちは、母親は何にもしてくれないっていつてグチってたけど、ホラ、いいお母さまじゃないの」

そして、彼女たちは、まあ、何ておいしいチーズケーキ、このちらし寿司もおいしいわ、そういえばほんとにモリって、お気の毒。

冗談じゃない。それに……、私は、いざ死ぬかもしれないというその時に、もう一つ、大きな不安に思いあたった。つまり私は、天国と地獄の、どっちに行くのだということに。

小さい頃、大人たちは教えてくれたものだ。

「ウソをついてはいけませんよ。エンマサマに舌を抜かれますよ」

悪いことをした人は地獄にいき、良いことをした人は、天国に行く。そう信じて、私は悪いことだけは、すまいと思ってきた。したとしても、地獄に行くほどの大犯罪だけは、すまいと思つて生きてきた。だけど、天国も地獄も、この、地上のわれわれの暮しの全てが、全部見透せるのだという。いわば、彼らは、私たち人類よりずいぶん早くから、宇宙中継で、テレビを見ているというわけだ。

テレビならば、面白い方がいい。マカロニウエスタンとか必殺仕掛人だとかが、地上の日本でも大いに流行ったものだけど、もしも、天国で、それが流行っているとしたら。五十人の頭の皮をはいだこともなければ、ひとりの足を投げ綱で巻きつけるやいなや、それをひきずって馬を走らせるなんてこともしなかった。いわゆる善良なる市民、ただの町の人われわれの場合、

「もういいよ、天国はいっぱいだから、地獄でまけといてくれませんか」

そういうことが、行って戻って来た人がいないだけに、解らなくて困るのだ。いや、それでも何とか天国に行けたとする。だけど、行って、私は何をするのだろうか。何でも天国の人たちは、頭に光る輪っかをつけて、背中には羽根などつけているけれど、夜になっても、あれじゃまぶしくて眠れないのではあるまいか。それにわたしゃ、地上では足で歩いてたのに、天国で羽根をパタパタさせて飛ぶ技術覚えるのは、この年で、今更しんどい。私は泳ぎも出来なければ、自転車にさえ乗れないくらいの運動神経なのだから。

「大丈夫ですか、大丈夫ですか!？」